

の家々へ配りしが、其隣へ行たる士、その日聞て語られし趣也とぞ、凡牛馬は人の勞をたすけて、世の爲有益の物なること、他の獸にまされり、疎かにあつかふべきかは、牛も舊主を見たりて涙を流せし話、既に續崎人傳の評に録せり、智も亦人にちかし、老て用る所なしとて、餌取の手に委て屠などは、其情牛馬におとれり、

〔兔園小説三〕五馬、三馬、二馬、

著作堂稿

陸奥の伊達郡箱崎の農民傳兵衛が子に、松五郎と呼ばれしものは、その性馬を好むにより、栗毛の馬を一疋もてり、さればをり／＼乗り走らするに、その秣飼ふことも、又撫で洗ひする事も、よろづ人には任せずして、手づからするをたのしと思へり、その馬既に五歳になりける文政二年己の卯の冬のころ、松五郎は病みわづらひて、その年の十二月十二日に身まかりぬ、○中されば松五郎が遺愛の馬は、ぬしの不幸の事に紛れて誰とて見かへるものもなく、纔に秣を與ふるのみ、厩に繋ぎ置きたりしに、その次の夜の子の時ばかりに、馬にはかに狂ひたけりて、絆をちぎり、戸を蹴はなちて、いづこととはなく、馳せ出でたり、あるじはさらなり、僕共もこの物音に驚き覺めて、こはいかにまさしく、馬こそはなれたれ、とく追ひとめよと罵り騒ぐに、眞夜中の月鮮やかなれば、松明を把るまでもなく、索を腰にし、棒を引き提げて、おのも／＼追ふ程に、馬ははやくも松五郎が墓所のほとりに馳せゆきて、其處につどひし癖者等を駈けたふし、蹠にじる勢ひ特に猛くして、當るべくもあらざりけん、矢庭に四五人蹴仆されて、玄ばしは起も得ざりし折、傳兵衛が奴僕等は推しつゝきて、追ひかけ來て、此ありさまに又おどろきて、あたりを見るに、松五郎があら墓を發れたり、扱はしやつらが所爲にこそ、みな逃すなと罵りて、ひとりも漏さず生捕りけり、○下

〔日本書紀十六武烈〕由是太子欲往期處、遣近侍舍人、就平群大臣宅、奉太子命、求索官馬、大臣獻言、陽進曰、